

## Special Essay

### 医学図書館は生まれ変わるか

図書館長 東 英穂

1969年5月、当時の医学図書館長 中村昌弘教授は次のように述べている。「図書館の整理は終わった。これからは Reference Service の時代である」。確かに90年代に入り医学 Journal の IT 化が急速に進み、文献検索や論文投稿などは Web site 上で完了できるようになったが、書籍の CD-ROM 化はそれほどでもない。従って、市立図書館には時折通っているが、医学図書館は極力避けている。何故か。まず、入り口の磁気監視付き bar と手荷物・食物持ち込み禁止の野暮な看板が気に入らない。モルグのような殺風景な閲覧室、湿っぽく澱んだ痰壺のような書庫、傷害保険の必要な鉄製階段、人間工学を全く無視した書棚、さらに決定的なのは蔵書の貧弱さ。1953年6月の大洪水で貴重な書籍の大半を失って以来、魅惑的な書籍、記念碑的な名著、稀覯書もきわめて少なく充実していない。唯一、積年の医学 Journal が老朽化した図書館の屋台骨を細々と支えている。付帯施設（談話室・カフェテリア・オーディオ、ビデオ、DVDなどを完備した視聴覚室）も勿論ない。閲覧室・書庫が客間・書斎とすれば、これらの付帯施設は居間に当たる。居間の無い図書館なんて目玉の入っていない達磨、あるいは、ワサビの入っていない寿司のようなもので、面白くも食えたものでもない。臨床で患者さんに追いまくられていた頃、図書館での一時の安息が懐かしく思い出される。そんな憩いの場所は今の図書館にはない。「知」の桃源郷というアレキサンドリアの図書館がすぐ思い浮かぶが、当図書館をみていると「ここは地の果ナイジェリア」と詠嘆したくなる。

さて、この図書館に生き延びる道は残されているのか。1932年1月以来医学に関する「知」を細々ではありながら蓄積してきた図書館の歴史を踏まえると、次の3つの方策が考えられる。第一に県南では唯一の医学情報センターである当図書館と他の医療機関との連絡網を形成し、医療情報を積極的に発信できるようにする。第二に図書館内では IT 化、ビジュアル化を徹底して行う。第三に築38年経つ図書館を建て替え、付帯施設の充実化を図る。これら3つが早急に実現されなければ生き残れないと思われる。その為には法人の支援が不可欠である。是非一度理事の方々には老朽化した本図書館を視察して欲しい。